

旭川の歴史・文化（テーマ別）

河川交通（舟運）の歴史	・・・・・・・・・・1
岡山平野の干拓地（新田）歴史	・・・・・・・・・・7
利水の歴史	・・・・・・・・・・15

河川交通(舟運)の歴史

旭川の河川交通

旭川では、平太舟¹を改良工夫して浅瀬を自由に航行できるようにした高瀬舟という川舟の往来が、古くから発達し、中国山地や吉備高原の人々の生活と瀬戸内海を結びつけていました。

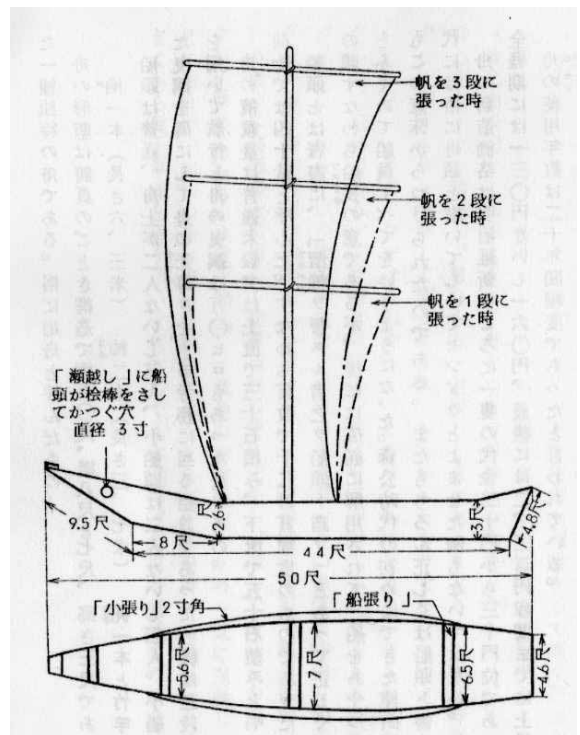
旭川を往来した高瀬舟は、物資だけでなく座席を設置し、人を運ぶ飛船(=日船=人舟)として運行していました。高瀬舟の他にも河川交通手段として、筏流しが行われていました。筏は材木(勝山産)や竹(落合産)を下流へ大量運搬する最良の方法でした。現在の建部町の架橋場所付近では、対岸の村へ行き来する渡し舟の発着場となった渡船場が多くありました。



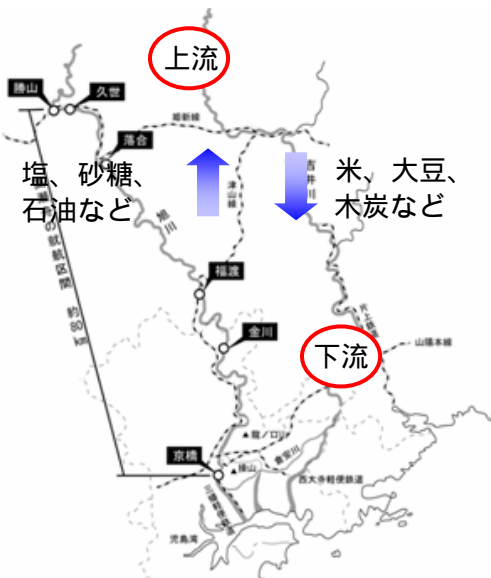
高瀬舟 (出典：建部町旭川物語)

高瀬舟とは・・・

旭川の高瀬舟は吉井川と同時に、岡山藩主宇喜多秀家(1573(天正元)年～1655(明暦元)年)全盛時代に開通したものとされていますが、詳細な記録は残っていません。高瀬舟は鉄道が開通する以前の物資や人を大量輸送する重要な交通機関であり、最上流地点の勝山町から下流の京橋付近まで水上16里(約65km)を運行していました。高瀬舟とは、主に河川で使用された喫水の浅い木造船で、一般に長さ14～16m(約50尺)、幅2m(約7尺)前後です。田植期(5月頃)～秋の彼岸の水落とし(9月23日頃)の間は稲の用水のための井手²をつくるために運行ができませんでした。そのため、高瀬舟は冬季の仕事に限られており、船頭は農業との兼業者が多かったそうです。



帆かけ高瀬舟の構造 (出典：高瀬舟 今井三郎著)



高瀬舟による物資の流れ

舟の積荷物は下り船岡山行きで米、大豆、木炭などの土地産のあらゆる産物。上り船の荷物は生活必要物資一切と畳表、塩、砂糖、石油などが運ばれていました。旭川舟運の最上流地であった勝山町と岡山間の1往復に1週間を要したが、下り舟は1日で岡山に着き、上り舟は船で寝泊りしながら5日程度を要した。

1 平太舟：石材運搬の船 2 井手：井堰のこと

高瀬舟の変遷

旭川流域の高瀬舟に関わる歴史

初期

- ・岡山藩主宇喜多秀家「天正元年(1573)～明暦元年(1655)」全盛に時代に開通したものとされる。
- ・藩政時代には高瀬舟の運行は管理され、大きな活動には発展しなかった。

最盛期

- ・元禄15年(1702年)頃、(旧)川上村まで舟運を開く試みがあった。
- ・明治初期、交通が自由になり最盛期には300～320隻の舟が(旧)勝山・岡山間を往来
- ・明治3年(1870年)には、(旧)八束村まで舟が運行(ただし、短期間で廃止)
- ・運航の最上流点は(旧)勝山であった
- ・(旧)落合町が舟の出発点としてされる(水量の関係)
- ・明治24年山陽鉄道開通
- ・明治31年福渡まで鉄道が敷設(高瀬舟による輸送が次第に衰退しはじめる。)
- ・大正10年(1923)頃、旭川の高瀬舟数は約200隻
- ・同年10月、『高瀬舟組合』が結成
- ・大正12年作備線の開通
- ・大正14年、(旧)勝山町でも鉄道開通に伴い衰退。
- ・昭和9年の水害で完全に消滅したとされている。

(参考資料: 建部町史、高瀬舟・今井三郎著、旭川: 吉沢利忠)

本格的に積荷が行われたのは旭川・備中川・河内川の落ち合う落合町が主宰地だったとされています。そのため、日船に乗る人々は落合町へ陸路を利用して乗ったとされています。

高瀬舟は、明治以降、鉄道の開通や洪水の影響などで次第に衰退し、昭和のはじめ頃にその姿を消したとされています。



落合高女の修学旅行：福渡までは舟で、福渡から中国鉄道に乗り換えた。(出典: 建部町史 通史編)

室町時代の末期に開かれたとされる旭川の舟運は、中世から近世にかけて物資や人の輸送のための重要な交通路でした。

最盛期には、300～320隻の舟が勝山・岡山間を往来していました。

高瀬舟の起点となる勝山町あたりは、水量が少なく、運行に支障をきたすケースが多かったため、実際には、積荷が少なかったとされています。



日露戦争当時、軍用の大麦を積み込んだ高瀬舟の集団(明治38年 落合町)

舟運を支えてきた舟乗りたちの労苦

高瀬舟の運行の際、下りは流れを凝視して瀬と淵を巧みに舵取りし、上りは瀬を引き上げる重労働に絶えなければならず、船乗りたちは身の安全確保とともに大変な苦労を背負っていました。

舟をより安全に通すためには、川掘りが必要でした。川掘りには、川に入って竹杭を打ち込み、杭の間を底ざらえして、幅4mほどの舟道を作る困難な作業が必要で、船乗り自らも作業に従事していました。1923(大正10)年、旭川の高瀬舟の数は200隻余りで、その船主たちは、川の底ざらえや舟乗りの品質向上、非常時の救済などを目的にした「高瀬舟組合」を結成しました。



赤岩と呼ぶ岩には高瀬舟の引綱によって刻まれた跡が残る(旭川中流部: 御津町)
(出典: 『旭川』山陽新聞サンブックス)

【上流部 ~木材のまち勝山~】

旭川の河川交通の最上流点となっていた勝山は、今も残る白壁の蔵屋敷が往時の賑わいを漂わせています。ここは、かつて高瀬舟とともに筏流しが行われ、この町を西日本有数の木材の町に育てました。現在も、旭川水系約5万haの林野を後背地に「木材のまち勝山」として全国に知られています。



勝山木材ふれあい会館
(出典：真庭木材青年協議会HP)



代官所陣屋門(重願寺)

【中流部 ~陰陽水陸四通八達の要地、久世~】

中世以降、川のそばに自然発生的に「市」がたち、大いに賑わうようになります。その代表的な町が真庭郡久世町。『久世町史』には、「陰陽水陸四通八達の要地なり、随て古来四方物資集散の場となり」と記されています。山中地方の鉄や煙草は久世まで牛馬で運ばれ、年貢米などとともに久世から高瀬舟で岡山に運ばれました。久世は代官所も置かれ、この地方の商業の中心地として発展しました。今は中国自動車道と米子道のクロスする交通の要衝として栄えています。

【中流部 ~落合ようかんと竹の筏流し~】

旭川・備中川・河内川の落ち合う落合町は、物が行きかう町として、元禄時代にはすでに49艘の高瀬舟が舟行したことが記録されています。そうした中、上流の吉備高原地帯の産物である小豆に、下流から運ばれてくる砂糖を結びつけて誕生したのが「落合ようかん」です。高瀬舟のかたちを模った舟形のものなどが特に有名で、現在も地産品として多くの方に親しまれています。旭川では材木のほか、竹の筏流しも行われていました。竹は落合町旦土のものが最良だったということです。



(出典：古見屋羊羹(岡山県真庭市)HP)
(出典：『旭川』山陽新聞サンブックス編)



京橋のたもとの賑わう朝市の風景
(出典：備前岡山 京橋朝市HP)

【下流部 ~京橋界限のにぎわい~】

旭川下流域にある山陽道と旭川が交差する京橋は、城下町岡山の玄関であり、京橋下は、陸上交通と水上交通の結節点でした。京橋界限は、米、木材、炭、鉄などの内陸の産物を運ぶ高瀬舟と海産物を積んだ船の発着場・荷揚げ場となっていました。大正時代には、問屋や商店街が形成されていましたが、近代になるとこの界限は定期航路の港として賑わいました。現在も京橋のたもとの地元の方々を中心としたボランティア組織による京橋朝市が河畔の賑わいを取り戻しています。

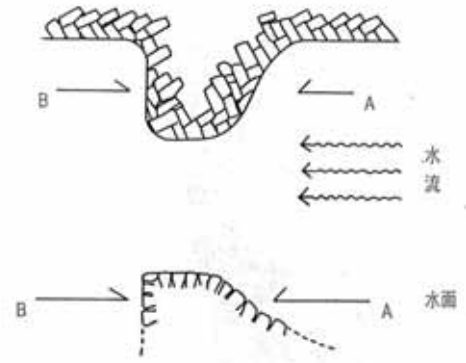
今も残る高瀬舟の発着場の遺構

(旧)勝山町の高瀬舟の発着場跡は、県下唯一の巻石構造の護岸となっています。巻石構造とは、柱や構造物の土際の部分を石で巻きめぐらし、腐れ留めしたものです。「ガンギ」と呼ばれる石段とともに、700mに渡って今も残されています。



(旧)勝山町にある巻石構造の護岸
(出典：『旭川』山陽新聞サンブックス)

その他の発着場の特徴として、旭川中流部で見られる河道内に突き出した発着場があります。波止の形状は上流に面した側が波の勢いをうまく和らげるために滑らかな流面体が形成され、舟乗りの安全に配慮した発着場となっていました。



大手ノ市の波止め
(出典：『建部町史』民俗編)

旭川流域の高瀬舟発着場跡

【上流部 ~ (旧)勝山町の高瀬舟発着場~】

旭川舟運の出発地点として栄えた(旧)勝山町では、いまでも高瀬舟発着場が残っています。



(旧)勝山町の高瀬舟発着場跡

【中流部 ~ (旧)落合町の高瀬舟発着場~】

落合は、旭川河川交通の要衝として早くから開けたところです。町の中心である垂水には高瀬舟の発着場が置かれ、活気にあふれていました。



(旧)落合町の高瀬舟が運行する様子(明治38年)

【中流部 ~ 建部町の高瀬舟発着場~】

旭川中流部は様々な支流が合流し、流量が増すため高瀬舟の数では、勝山よりもむしろ中流部が多かったようです。



建部町の高瀬舟発着場跡

【下流部 ~ 岡山市京橋付近の高瀬舟発着場~】

大正時代頃の京橋付近には上流から運ばれた品物を扱う市があり、周囲には問屋や商店街が形成されていました。



係留される高瀬舟(京橋付近)

高瀬舟の衰退

旭川流域の経済・文化の伸展に大きく寄与した高瀬舟も、明治 24 年の山陽鉄道の開通、明治 31 年の中国鉄道の開通、大正 12 年の作備線の開通、そして度重なる洪水の影響で次第に衰退し、加えて自動車の出現とその目覚ましい活躍により、昭和のはじめ頃その役目を終えます。高瀬舟の名残はほとんど消えてしまいましたが、勝山町のほか、落合町や建部町、御津町でわずかに高瀬舟発着場の痕跡が点在しています。



素盞鳴神社（御津町）に残る高瀬舟の絵馬
（岡山県立博物館蔵）
（出典：『旭川』山陽新聞サンブックス）

筏流しとは・・・

旭川本流では勝山町芝原、新庄川では勝山町荒田が筏流しの最上流点となっていました。

材木を大量に運搬する方法として利用され、材木を葛^{かづら}で束ね、それらを全長 20 数メートルの筏に組みました。これを一艘^{そう}と呼び、1 人だけ乗るのが普通でしたが、万が一の際に助け合うため、五～七艘と連れ立って下るのが習わしでした。また、材木だけでなく落合で採取した良質の竹も筏に組んで川下りしていました。

出発して、二日後には岡山へ到着し、兵団～石関辺りに並ぶ材木問屋へ渡すと翌日には筏に積んでいた自転車で舵を積んで帰宅していたということです。



岡山城の下に集まった筏（昭和 7、8 年ごろ）
（出典：『旭川』吉沢利忠著 山陽新聞社）



筏を組んだ最上流点に建てられた記念碑
（出典：『旭川』山陽新聞サンブックス編）

昭和 3 年当時、筏乗りが 100 人以上いたとされており、うち約 50 人は勝山町の人々が占めていました。また、筏流しも高瀬舟と同様に、主に冬季の仕事に限られていたため、ほとんどが農業との兼業だったそうです。筏流しもやがて、トラックや列車の輸送にとって代わられます。昭和 29 年に旭川ダムや旭川合同用水の井堰が建設されると、旭川の流れは完全に断ち切られてしまい、高瀬舟とともに輸送路としての旭川の華やぎを失ってしまいました。

渡し舟とは・・・

旭川の中流に位置する建部町は、高瀬舟往来の重要な中継点となっていた一方、対岸を往来する人々を乗せる渡し舟の渡船場が昭和初期まで存在していました。

河川改修や架橋建設といった道路環境の急変から、渡し舟のその姿は次第に消えていきました。現在の建部町内の架橋場所に渡船場があったということです。

当時、八幡渡し、品田渡し、大田渡しなど町内の地名を呼び名として使っていましたが、渡し舟が消えた今、「渡し場」という地名が名残として残っている地区があります。



岡山平野の干拓地(新田)の歴史

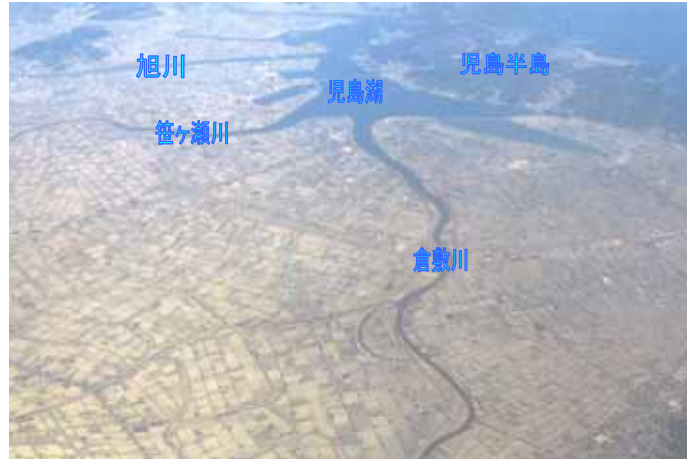
岡山平野の干拓とは・・・

『日本書紀』の中に「^{きびのこしま}吉備子洲」「^{きびのあなうみ}吉備穴海」という言葉が見られます。吉備子洲とは児島のことで、吉備穴海とは児島湾のことです。実は戦国時代まで、児島は吉備の国の南部に横たわる一つの大きな島でした。

児島だけでなく、箕島、早島など島のつく地名の多くは、海に浮かぶ島だったと考えられています。現在の岡山平野の大部分は海の中だったわけです。現在の岡山平野の耕地は約25,000haです。そのうち、約20,000haが干拓によって生み出されたものと言われ、時代によって地図がどんどん描き替えられていることから、岡山市の歴史は干拓史の上に形成されたとも言っても過言ではありません。



弥生時代の海岸線(推定)(出典:岡山の干拓物語HP)



児島湾の眺望:耕地はすべて干拓により創出されたものである(出典:「岡山平野鳥瞰記」中国四国農政局 山陽東部土地改良建設事務所)

耕地面積は全国規模でみても、8世紀末に約100万ha、16世紀末には約200万ha、19世紀後半には約400万ha、20世紀半ばで約600万haと飛躍的に拡大しています。なかでも日本三大干拓と言われる秋田県の男鹿半島と長崎県の諫早湾、そして岡山県の児島湾で最も大きな干拓が行われています。干拓は、古くから農業生産の拡大するための農地の確保が主な目的でした。岡山平野の干拓でも同様の目的で耕地が行われましたが、戦国時代や江戸時代になると、藩の領土の拡大を目指す事業として干拓の本来の目的は多様化していくことになります。

岡山平野の干拓の経緯

【江戸時代以前 ~耕地拡大から富国強兵へ~】

古代から人々は少しずつ耕地拡大に励んできました。弥生時代になって人口が増えてくると、耕地が不足してきます。そして、鉄製の農具が普及してくると耕地の拡大はさらに進みます。

平安時代になると、瀬戸内の河口付近にはますます広大な干潟が発達し、貴族や豪族、寺院などによって開墾された私有地、荘園(庄)があちこちにあります。このころから権力争いの糧(領地の拡大)として干拓は進められるようになります。

さらに戦国時代になると、岡山城主・宇喜多秀家は、積極的に干拓を行います。そして岡山城の建設や城下町の整備、堤防(宇喜多堤)の建設など、富国強兵のための藩の基盤づくりを進めていきます。



旧街道沿いの早島の町並み:この街道は宇喜多堤と呼ばれ、宇喜多秀家時代にこの場所に堤防を築き、海の干拓を進めていった場所。

【江戸時代 ~新田：農業生産の拡大~】

戦国時代が過ぎ、江戸時代になって政治が安定してくると、各藩ではますます新田の開発にエネルギーを注ぐようになりまし。年貢は米が基本となる石高制だったので、藩では米をより多く収穫できるよう、田を広げることが大きな課題となっていました。

近世の新田干拓は、全国で1,804件の開発が行われています。そのうち、岡山県は266件で、都道府県別でみると、ほかをはるかにしのいで第1位となっています。

江戸時代に干拓は増加しますが、大規模な干拓が可能になった主な理由として、次のような点を挙げられます。

1. 技術の進歩	築城が盛んに行われた戦国時代には、土木技術が飛躍的に発展した。
2. 藩の権力安定	干拓には大量の資金、物資、労働力が必要だが、それを動かせるだけの権力があつた。
3. 土地不足	人口増加により、土地不足が深刻になった。

近世における新田開発件数

年代	岡山	全国
天文～元亀（1532～1572）		6
天正・文禄（1573～1595）	3	21
慶長・元和（1596～1623）	4	73
寛永（1624～1643）	43	113
正保～明暦（1644～1657）	35	132
万治～延宝（1658～1680）	51	211
天和～正徳（1681～1715）	33	261
享保～元文（1716～1740）	11	82
寛保～安永（1741～1780）	10	108
天明～享和（1781～1803）	9	100
文化・文政（1804～1829）	15	186
天保～嘉永（1830～1853）	33	262
安政～慶応（1854～1867）	19	249
計	266	1,804

（出典：『倉敷市史3近世上』（岡山の干拓物語HP））



沖新田東西之絵図（岡山市立図書館蔵）
（出典：岡山の干拓物語HP）

江戸時代の初頭、備前松山藩によって、倉敷の西部一帯が干拓されるに伴い、かつて海に浮んでいた児島は陸続きとなります。

江戸時代になって政治が安定してくると、岡山藩では、歴代藩主の池田忠雄、光政、綱政らが、農地を拓げ農業生産を拡大して藩財政の増収を図るため、積極的に干拓に取り組んでいます。

中でも1692（元禄5）年に完成した「沖新田」は備前藩の土地不足解消や大災害による排水路の確保を目的として進められ、干拓面積約1,918haという前代未聞のスケールとなりました。また翌6年には用水路浚渫、橋、排水処理を行う樋門なども完成し、高潮の被害から住民を守り続けました。

【明治時代以降 ~児島湾の干拓の壮挙~】

明治時代になると、多くの武士は秩禄を奉還させられ仕事をなくした武士（士族）を救済するために、1879（明治12）年頃から、多くの人が岡山県に対して児島湾干拓の出願を行うようになります。

児島湾の干拓は、その後大阪の資本家、藤田傳三郎に委ねられ、洪水や古田の湿田化、漁業補償など20年近く激しい紛糾で幾度も挫折しましたが、1899（明治32）年ようやく工事が始まることとなります。

児島湾干拓は第一区～第七区に分けられました。第二区が完成する明治45年に藤田は亡くなりますが、干拓は引き続き行われました。そして、1959（昭和34）年に児島湖が完成し、4年後の1963（昭和38）年に第七区の干拓を終え、総計は5,486haの大干拓はすべて完成となりました。



児島湾干拓を最初に設計したオランダ人技術者R・ムルデルが作成した児島湾干拓計画図

（出典：「岡山平野鳥瞰記」中国四国農政局 山陽東部土地改良建設事務所）

旭川流域の干拓（新田）の変遷

旭川流域の干拓（新田）に関わる歴史

- ・ 1573（天正元）年、宇喜多直家が岡山城に移り城下町岡山の発展がはじまる。
- ・ 1597（慶長 2）年、岡山城の改築が完成し、城下町の規模も拡大整備されるとともに、旭川を城の守りとして、流路の付替えの改修を行う。
- ・ 1600（慶長 5）年、徳川家康が江戸幕府を開く。
- ・ 1628（寛永 5）年、米倉新田（民営）などが開発された。
- ・ 1656（明暦 4）年、第三代藩主池田光政、領内に新田開発令を出す。
- ・ 1664（寛文 4）年、金岡新田（民営、のち藩営）が開発された。
- ・ 1679（延宝 7）年、藩主池田光政の臣下、津田永忠によって、最初の岡山藩営である『倉田新田』（倉益新田、倉富新田、倉田新田）が開発された。また、この新田の用水として倉安川が開墾された。
- ・ 1684（貞亨元）年、永忠によって、『幸島新田』（藩営）が開発された。
- ・ 1686（貞亨 3）年、百間川の完成。
- ・ 1687（貞亨 4）年、永忠によって、岡山後樂園が造営された。
- ・ 1691（元禄 4）年 9 月、綱政が永忠に『沖新田』（藩営）の開発を命じる。
- ・ 1692（元禄 5）年 7 月、工期わずか 6 ヶ月で『沖新田』が完成する。
- ・ 1693（元禄 6）年、百間川を延長し、沖新田の中央を貫通させるとともに、河口部の潮止堤に大型樋門 20 基を連結した樋門を設置した。

（参考資料：「地域社会と河川の歴史」岡山河川工事事務所、岡山の干拓物語HP）

近世前半の寛永から正徳のころ、干拓（新田）ひとつの山が見られます。この時期は藩の政治の確立期で、岡山藩でも積極的に干拓に取り組んでいます。これらを「藩営新田」といいます。

そのほか、幕府が中心となっていくものを「公儀新田」、民間人によるものを「民営新田」といいます。また戦国時代に武士だった人が農民にもどって開発したものを「土豪開発新田」、町人によるものを「町人請負新田」、村単位で請け負ったものを「村請新田」といいます。この時期、民営新田が主に開発されましたが、他国の入植者が法令を守らなかったりするため、やむなく藩営新田として岡山藩が新田を開発することとなります。

【倉田新田：1679（延宝 7）年 約 300ha】

1679（延宝 7）年、藩営としては初の干拓である倉田新田が開発されます。当時、大洪水に伴う農村部の復旧や藩財政の貧窮を立て直そうと藩主池田光政に仕えていた津田永忠が提案したもので、その頃すでに隠居していた光政の許可により約 300ha が開かれ、倉田、倉富、倉益の 3 つの村が置かれました。かんがい用水に課題を抱えていたこの新田は、吉井川から水を引き、岡山城下を流れる旭川に合流する倉安川を開削しました。この川は高瀬舟の運河としても使われ、永忠はこれ以降の用水にも地域の総合開発を目指して多目的に用いるという考えを取り入れます。



上道郡新田絵図（岡山大学池田家文庫蔵）
（出典：岡山の干拓物語HP）

【幸島新田：1684（貞亨元）年 約 560ha】

最初に計画されたのは 1657 年ですが、当時の技術では河川の河口部の干拓は困難とされていましたが、1683 年、藩主・池田綱政の許可を得た永忠は、翌年 2 月に着手し、6 月には潮止め工事を完了させました。工事に当たって永忠は、まず海流などの条件を徹底調査したうえで、排水をよくするために神崎川の河口を広げ、遊水地を海へ設けました。そして河口の末端に樋門をつくり、堤防内の新田の排水調整を行いました。



新田開発概念図

（出典：「岡山平野鳥瞰記」中国四国農政局 山陽東部土地改良建設事務所）

沖新田の干拓の意図

1673(延宝元)年の大洪水は、中川周辺の農村部を襲い、大災害となります。元来、岡山平野は農業をしていく上で必要な水田に利用できる土地が少ないため、その後数年、大凶作が続き、農民は困窮し、藩財政も窮迫してしまいます。津田永忠はこの危機を救うため、中川周辺の河川排水をすべて一本化する排水路の延長(百間川の築堤)そしてその河口に1,900haという大干拓(後の沖新田)を行う、という前代未聞の壮大な構想を打ち立てます。この構想は、藩財政の困窮にあえぐ家中、そして先の洪水で壊滅的打撃を受けた中川周辺農民の猛反発にあいます。やむなく永忠は計画を断念し、1679(延宝7)年、利害関係の少なかった倉田新田を開発し、同時に倉安川の開削も行います。



しかし、それでも水田の土地が少なく、限られた土地を多くの農民が少しずつ分けて作っていきました。そして彼は当時の干拓技術の水準をはるかに超える沖新田の開発に着手することを決意します。その後、1684(貞亨元)年の幸島新田の開発により河川の河口部の干拓が可能であることを実証した永忠は、その2年後に百間川の築堤に着手します。そして、1692(元禄5)年7月、南北4km、東西5kmという旭川流域では最大の干拓となった沖新田約1,900haを完成させることとなります。

津田永忠(岡山市沖田神社)
(出典:『岡山平野鳥瞰記』中国四国農政局 山陽東部土地改良建設事務所)

旭川流域における干拓の流れ

1679(延宝7)年 倉田新田(約300ha)



1684(貞亨元)年 幸島新田(約560ha)



1692(元禄5)年 沖新田(約1,900ha)

13年余りで約2,760haの新田開発を実現

沖新田の干拓とは・・・

1691(元禄4)年9月に綱政が永忠に沖新田の干拓を命じます。堤防予定線は、波の直撃を受けないよう潮の流れに沿って決められました。沖新田ができる前は、広大な潟のある遠浅の海だったようで、これを利用して沖新田が作られることとなりました。ここならばしっかりとした堤防をつくり、排水をすることで、大がかりな埋め立てをしなくても、広大な土地が得られると考えられたようです。また、土地の問題だけではなく、水の問題も重要でした。田んぼをつくり、そこで生活をしていくためには、塩分を含まず、飲むことが可能な水が必要でした。そのため、水は、吉井川、旭川、砂川を中心に、それらから倉安川といった運河や、祇園用水などの用水路を引いて沖新田全体をまかなうこととしました。

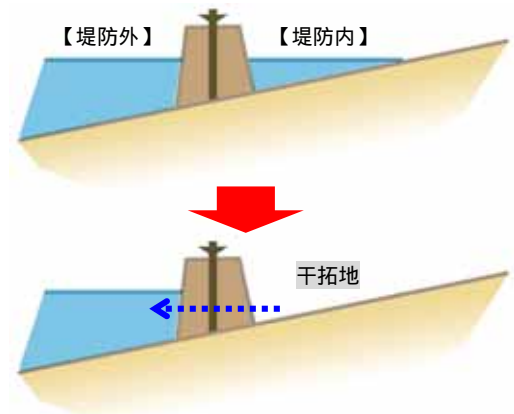


沖新田東西之絵図(岡山市立図書館蔵) (出典:岡山の干拓物語HP)

沖新田の干拓方法

沖新田の干拓方法は、まず十分な調査をした後、水中に全長およそ 12km の潮止堤防をつくります。そして堤防をつくった後、海の干潮にあわせて、堤防内の海水を水門から海へ出します。やがて干上がった海底に道路、用水路、橋などを整備して、人が住めるようになります。

また特に海に近い辺りでは、海水の塩分が田に入ってくるのを防ぐ「潮廻し」となる「四番川」や遊水地として「五番川（今の百間川のこと）」をつくったりして、田畑を守る工夫をしていました。田や畑は、海底を干し上げたままでは、土の中に塩分が残り、農作物ができません。このため、「塩抜き溝」という溝を田の表面に掘り、数年かけて田や畑の塩分を十分に抜くことで、農作物ができる土となります。



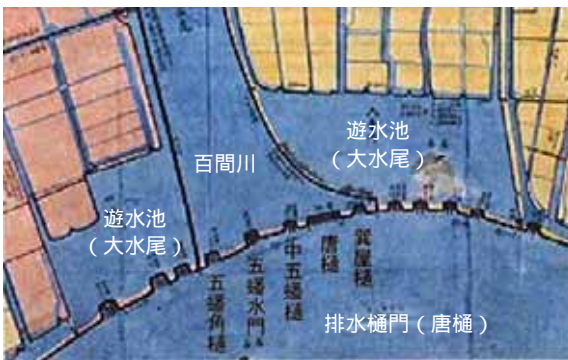
干拓の方法：干拓は海の中の堤防を築き、引き潮を利用して海水を出し、新しい土地を築く。



「潮廻し」とは、沖新田の堤防の内側に沿って流れる川にことをいいます。これは、潮止めの堤防を作っても、海水の塩分が堤防の内側に染み出してくるため、塩分を完全に止めることはできません。潮廻しでは、用水路を通して来た真水をここに溜めて、塩分濃度を下げる働きをします。この水もある程度溜まったら、海が引き潮になったのにあわせて、堤防の水門を開けて海に出します。

写真中央が堤防。右の川が「潮廻し」。左が児島湾。
(岡山市升田)(出典：岡山の干拓物語HP)

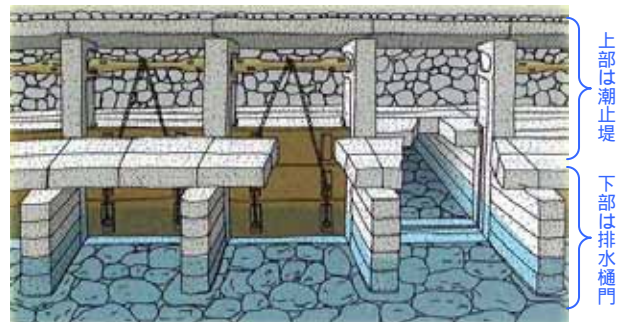
沖新田の排水処理



備前国上道郡沖新田図

河口付近で新田を開発するためには、海底を堤防で仕切る必要があります。干拓地は海面よりも低い土地となるため、洪水などにより堤防内の水が浸入した場合に備え、排水処理を行わなければなりません。沖新田では、百間川河口部にラッパ状の遊水池(大水尾)と潮止堤に大型樋門(唐樋) 20 基を組み合わせた高度な排水機構が考案されました。潮止堤及び 5 箇所の排水樋門により、海面より低い周辺地域からの排水を一時的に貯め、干潮時に樋門を開けて児島湾へ排水する一方、高潮時には樋門を閉めて海水の浸入を防ぎ、洪水時には速やかに児島湾へ洪水を流出させます。

この樋門は、昭和 42 年に新河口水門ができるまで 263 年間の長きに渡り、岡山を高潮の被害から守り続けました。「大水尾」とは、現在は百間川の河口付近に位置する遊水池のことを言います。百間川自体は、旭川の放水路となるものですが、現在は、流域の中川、庄内川や、砂川などの水が流れ込んで、河口に溜まっています。しかしこれらの川は、水の流量が多くないので、海が満潮の時には、海水が逆流することもあります。よって、ふだんは河口の樋門などで調整しながら、このたまった水を、児島湾が干潮になるのを待って、海に放水しています。



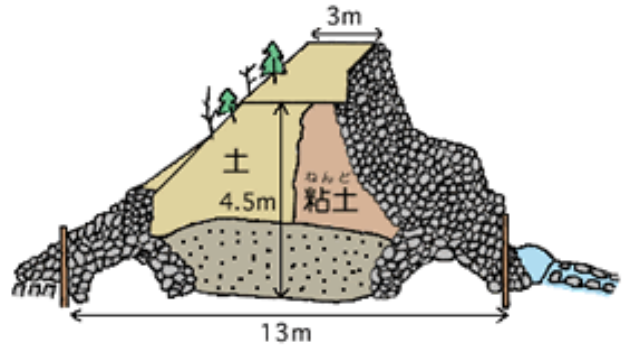
沖新田の排水樋門(唐樋)の構造図
(出典：出典：「岡山平野鳥瞰記」中国四国農政局 山陽東部土地改良建設事務所)

【堤防の概要】

干拓の際に行われた堤防工事では、全長約 12 kmとなる堤防を、旭川沿いから順に一番から九番の9つの丁場³に分けて同時進行で競い合いながら工事したとされています。

現在でもこの丁場の名残として「一番」「二番用水」「三番」「四番」「五番川」「六番川」「八番用水」「九番」など、地名や用水名が各所に見ることができます。

1692(元禄5)年1月11日に工事が始まりました。堤防は、工事現場毎に競争で作りました。そして最後の堤防をふさぐ潮止め工事が7月14日に行われています。つまり堤防自体の工事は、およそ半年で完成したのです。



堤防の断面図(出典:岡山の干拓物語HP)



現在の沖新田の堤防: 右手は四つ手網小屋

堤防の工事は、今のような大型の機械や鉄製の船はなく、すべて人間が材料を担いで運びました。船も中・小型の木造船で、堤防の石や粘土を運んでいたと考えられます。そして海の満干潮にあわせて船を出したり、樋門の工事をしたようです。したがって、現代の工事のように、大型の機械や船を使って24時間体制でやってしまう工事方法とは全く違います。現代のレベルで考えてもかなりたいへんな工事ですが、津田永忠をはじめ多くの土木技術者や作業員たち延べ103万8,867人によって、堤防は完成しました。

【堤防によってつくられた土地と用水】

当時の堤防工事の記録から、二番の丁場は、一番と三番の間に流れる二番用水としてしか名を残していません。また、大正から昭和時代の初期には、この用水の堤防に沿うように水田の中を「三幡轻便鉄道」が走り、旧岡山市の玄関口として開かれた三幡港から岡山市街地への陸上交通手段となっていました。

五番川は旭川放水路(現在の百間川)として、また沖新田の大水尾として役割を担っています。また五番川の河口へ差し掛かる四番川と六番川は、潮回しの池としての役割を担っています。



沖新田内の江戸時代(1818年)のころの地名・用水名(出典:岡山の干拓物語HP)

六番川や外七番の堤防の児島湾側には、かつて六番川などで淡水魚を採るために漁業者が設置していた「四つ手網小屋」といわれる施設が連なっています。現在は一般の釣り客に貸し出す観光遊漁施設となっています。

九番は沖新田の中で最も土地の低い位置にあるため、「堀田」が最も発達した地域でしたが、昭和時代の末から、九幡工業地帯として開発が進められました。

現在の沖新田内の町名(出典:岡山の干拓物語HP)



3 丁場: 工事現場

堀田とは・・・

沖新田の生活は、水田での稲作を主とした農業が中心でしたが、それは塩害との闘いの日々でもありました。海に面した沖新田は、台風などで堤防がくずれたり、あるいは海水が堤防をこえて入ってきたり、堤防近くでは土地が低く、湿地帯であったため、ふだんも海水の塩分が堤防からしみ出してくるなどして、それが田んぼに入ることで、農作物、特にイネが大きくならなかつたり、枯れる原因にもなっていました。そのため、水が貯まっても田んぼの面がつからない程度に、田んぼを持ち上げておく必要があります。そこで、田の土を掘って小高く盛り上げた部分に稲を植えました。この盛った部分の棚田と堀が交互に並んだ田を「堀田^{ほりた}」と呼びます。堀田をつくることで、その間を通る用水（堀）の水が、塩分を含む水をうすめるとともに、それらを押し流してしまうはたらきをします。沖新田の児島湾沿いはほとんどがこの堀田でした。



堀田：沖新田中央部(岡山市光津・小仕切)付近（岡山市教育委員会提供）（出典：岡山の干拓物語HP）



塩害を泥あげ作業の様子（出典：岡山の干拓物語HP）

また堀田の堀は、水を流す働きだけでなく、堀に田船を浮かべて、農作業の道具を運んだり、田んぼでとれた稲なども運んでいました。堀田は、土が水分をととても多く含んでいるため、べとべとの土で重たい道具を運んだりする時は、田船を使ったほうがよかったです。現在は、沖新田で堀田を見ることができません。昭和30～38年にかけて行われた「上南干拓^{じょうなん}」（百間川より東）や「旭東干拓^{きょくとう}」（百間川より西）で、児島湾や百間川などの砂を堀田に埋め立て、土地のかさを上げました。このため、海水面の高さと田んぼの高さはほぼ同じくらいになりました。また、堤防や水門なども近代的なものとなったため、堀田を作る必要はなくなりました。

沖新田の生活とさまざまな苦勞

【生活用水の確保の苦勞】

沖新田はもともと海底だったため、ほかの地域にあるような飲み水を十分に得ることのできる川はありません。沖新田は海に近い地域ですので、土の中から塩分が出てくるので、池も井戸も飲み水としては利用できません。また干拓地なので、全体的に地盤が軟らかく、深く掘り込むとすぐに埋まろうとしてしまいます。このため、水は沖新田以外の地域の川から、人工の川や用水路を通して水を得ていました。沖新田の東半分は、吉井川やそこから引かれた田原用水など、西半分は、吉井川から引かれた倉安川、旭川から引かれた祇園用水などを経て、沖新田各地域の用水に流していきました。



昭和初期の沖新田の用水路と家並み（出典：岡山の干拓物語HP）

これらの用水路は、沖新田の中でも流れる地域は決まっています。これは土地に高低があり、川や用水路の高さによっては田んぼに水の入らない場所が出てくるためです。また大切な水を平等に分けるためにも、川や用水路ごとに水の配分を調整する必要がありました。上流の村で田に水を入れたため、川の水が少なくなって沖新田の用水に水が入らなくなったときなどは、下流の村ではたびたび裁判を起こして、生活に必要な水を確保しようと努力をしました。このように、沖新田では農業に加え、水を確保することも新田に住む人たちの仕事だったのです。



現在の用水路と家並みの様子（岡山市君津）

【沖新田に生活する人々の苦勞】

『備陽記』『吉備温古秘録』によると、西側は東側よりも土地が低く、塩害があり、収穫が少なかったようです。にもかかわらず、同じ割合で年貢を課せられたため、西手に入った入植者の生活は困窮し、生活費を稼ぐために他村へ奉公に出て、耕作ができなかった様子が伝えられています。



機織り機（政田民俗資料館蔵）（出典：岡山の干拓物語HP）

農作業以外にも、沖新田を流れる砂川や百間川、用水路や潮廻しなどでは、フナやウナギなどの魚を捕って売ったり、児島湾に近いことから、明治時代からは海苔の養殖が盛んに行われていました。その他に、藁で縄を編んだり、筵を編むなどして、それらを売って生活をしていました。また、海に近い土地では、塩分に強い綿を栽培し、その綿で糸を作り、染めた後、機織りをして、反物を作ったりもしていました。

お風呂や洗濯などには、濾過しない用水の水が使われました。生活排水は用水には流さず、田畑に流すなど、村全体で用水の水質を守る意識がありました。

上米はほとんど年貢に取り上げられ、残り分も生活のためお金に替えるので、食事は小米や麦飯、雑穀が中心でした。日常の副食は1汁1菜に限られていて、淡水魚（フナ、ナマズなど）や海の魚（アミ、イワシ）などでした。

今も残る沖新田の遺構

沖新田では、堤防工事の完成した翌年から、新田の地割りを行ない、用水路や道路、樋門の工事がされ、土地の値段が決められました。

近年の生活の近代化で、道路が拡張されたり、堀田が消滅したり、古い樋門の改修など少しずつ変化の中、新田の地割りを位置づける重要な仕切りとなった「仕切道」がその姿や位置をほとんど変化させていないまま痕跡を残しています。中央の百間川の東手が「小仕切道」、西手が「仕切土手」といった道にそれに該当し、現在はアスファルト舗装がされ、道幅の広がった部分もあるものの、往時と大きな変化もないまま、生活道路として利用されています。

沖新田の堤防工事で、最後の潮止め工事がうまくいかず、「きた」という女性が自分から人柱となって龍神に捧げられた、という伝説があります。「人柱」とは、生きた人間を自然の神への捧げ物として海や川に沈めることで、「龍神」は、雨や水の神といわれています。つまり、堤防工事がうまくいかないのは、海に住む龍神が怒っているためで、人柱を立てたことで荒れる海を静めた、とされています。「きた」はふつう「おきた」といわれ、沖田神社との関係も言い伝えられていますが、未だに決定的な根拠や史料はありません。



沖田神社（岡山市沖元）：「きた」の伝説と関わりがあるとされています

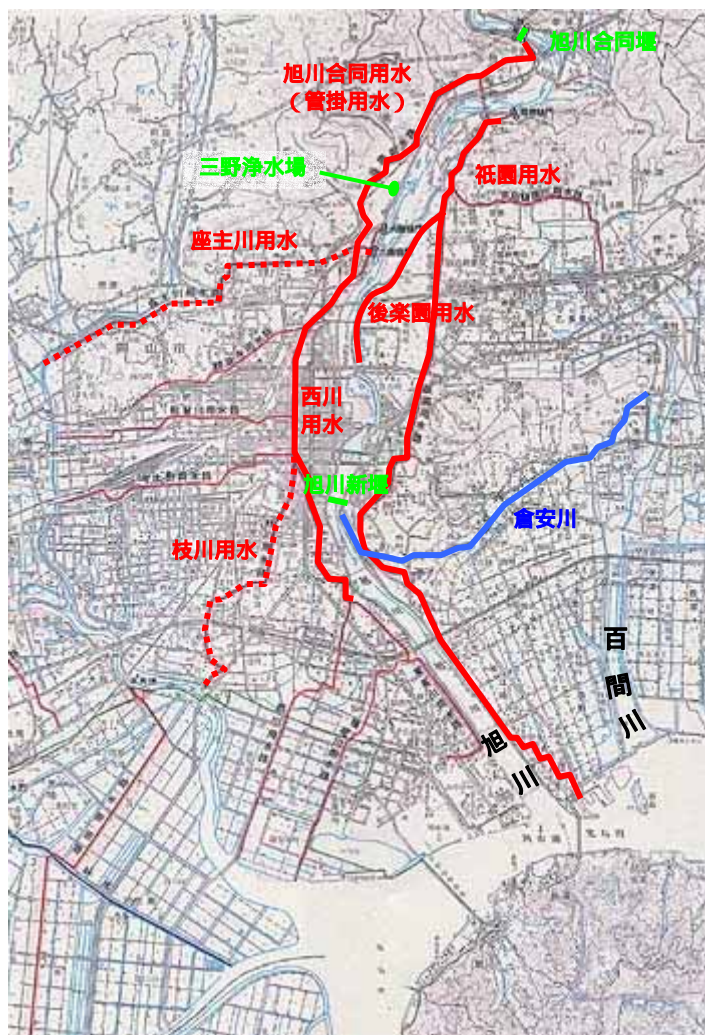
利水の歴史

旭川流域における利水

旭川の水利用の歴史は古く、特に江戸時代から盛んになった干拓地への農業用水の供給に重要な役割を担ってきました。今では、農業用水のほか、上水道、発電、工業用水として利用されており、さらに最近では、百間川の水質改善のための浄化用水としても利用されるようになりました。

農業用水としては、1954(昭和29)年3月に完成した合同堰で1秒間約16.2m³(小学校のプールに約20秒で水が溜められる量)が取水され、さまざまに張り巡らされた用水路により、2,300haの農地への水の供給が続いています。

旭川合同用水の下流に位置する^{さすかわ}座主川用水や西川用水、そして祇園用水のように、水路沿いには植物が茂り、魚や鳥などの生き物が生息しており、人々の生活に憩いを与える空間となっています。



旭川流域の主要な用水 (出典：岡山県農林水産部耕地課HP)

旭川流域の利水に関わる歴史

- ・江戸時代の慶長年間、「西川用水」が整備されたとされる。
- ・1663(寛文3)年、「管掛用水」(のち旭川合同用水)が完成。
- ・1679(延宝7)年、倉田新田の開発。この新田の用水として「倉安川」を開墾。
- ・1684(貞亨元)年、幸島新田の開発。
- ・1686(貞亨3)年、百間川の完成。
- ・元禄時代、「祇園用水」が整備されたとされる。
- ・1691(元禄4)年9月、沖新田の開発。
- ・1700(元禄13)年、後楽園の完成。
- ・1889(明治22)年、岡山市制施行。
- ・1902(明治35)年、岡上でコレラが大流行。
- ・1905(明治38)年、岡山市で上水道の供給を開始。
- ・1953(昭和28)年、「旭川合同用水」完成。
- ・1954(昭和29)年、「旭川ダム」・「旭川合同堰」の完成。
- ・1955(昭和30)年、「湯原ダム」完成。
- ・1972(昭和49)年、西川用水沿い「西川緑道公園」を整備。
- ・1975(昭和52)年、「旭川新堰」の完成。
- ・1994(平成6)年、異常渇水に伴い、取水制限が行われる。

(参考資料:「地域社会と河川の歴史」岡山河川工事事務所、国土交通省 岡山河川工事事務所HP、岡山県耕地課HP)

1905(明治38)年、全国で8番目に近代的上水道の供給を始めました。現在、上水道の給水人口は約62万人。岡山市では上水道の水源の約90%が旭川の水です。その他、工業用水としてクラレ用水などの取水設備があります。旭川水系での水力発電は、旭川ダムと湯原ダムで行われ、最大出力は10万7,500kW(約1万世帯分の1日の消費電力)に及びます。

岡山県内のダム位置図



岡山県内のダム位置図 (出典：岡山県土木部HP)

利水に関する旭川ダムと湯原ダムの概要

ダム名称	旭川ダム	湯原ダム
航空写真	 <p style="text-align: center;">旭川ダム（出典：岡山県土木部HP）</p>	 <p style="text-align: center;">湯原ダム（出典：岡山県土木部HP）</p>
ダムの概要	<p>旭川ダムは、旭川の中流部、河口から約40kmの御津郡建部町と加茂川町にまたがる地点に、旭川河水統制事業として昭和26年から29年までの4年の歳月を費やして建設されました。</p> <p>集水面積1,140km²、総貯水容量57,382千m³におよぶ貯水池を持つ治水、利水、かんがい、発電を目的とした堤頂長212.0m、堤高45.0m多目的重力式コンクリートダムです。</p>	<p>湯原ダムは、旭川の上流、美作三湯の一つである湯原温泉の露天風呂「砂湯」から上流約300m地点に、旭川総合開発事業として、昭和27年2月に着工し昭和30年3月に完成しました。</p> <p>集水面積255km²、総貯水容量99,600千m³におよぶ貯水池を持つ治水と発電を目的とした堤頂長194.37m、堤高73.5mの重力式コンクリートダムです。</p>
管理者	岡山県と企業局による共同管理	岡山県と中国電力株式会社による共同管理
主な利水の概要	<p>発電 岡山県企業局旭川発電所で、流水のダムからの落差を利用して、水力発電を行っており、最大18,700kwの電気を作り出しています。</p> <p>かんがい用水 旭川下流域の農業用水などに必要な水量を確保して、水不足による渇水に備えます。また、河川の流水を維持するための水量も確保されています。</p> <p>上水道用水 岡山市・建部町・美咲町・真庭市に上水道用水として約230万m³確保しています。</p>	<p>発電 貯水をダム本体上流約600mに設けられた取水塔から取入れ、下流の湯原第1発電所に送り最大26,600kwの電気を作り出しています。また、湯原第一発電所から放水した水も、発電所の下流にある社口ダムから久世町草加部にある湯原第2発電所へ送られ、ここでも最大23,700kwの発電を行っています。</p> <p>河川環境を守るための放流 ダム直下のえん堤発電所を経由し常時0.8m³/sの水を放流し旭川の流量を保っています。</p>
備考	<p>昭和59年3月に取水塔が完成。平成6年の渇水時に稼働した際、用水確保に十分な機能を果たしました。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;">取水塔</div> </div>	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;">湯原温泉の露天風呂</div> </div>

（出典：備前県民局旭川ダム統合管理事務所HP、真庭地方振興局 湯原ダム管理事務所HP）

旭川合同堰と旭川合同用水（管掛用水）

【旭川合同用水事業】

旭川合同堰が完成する以前は、丸太や石で造られた5箇所の堰から取水していましたが、水漏れがひどく、川の水位が下がると取水できなくなり、水争いがありました。また、ひとたび洪水が起こると簡単に流され、そのたびに修理に多くの費用と労力が必要となりました。

こうしたことから、旭川合同用水事業として、各用水を統一し、1つの頑丈なコンクリート製の堰から合理的に取水配分する計画が、1938（昭和13）年に3月に内務大臣より許可されました。

【旭川合同堰】

旭川合同堰は、岡山県の中央部を流れる旭川の下流（岡山市北部）に位置し、岡山平野約4,600haの農地のためのかんがい用水として取水しています。

昭和16年に始まった工事は戦後の材料難や労働力不足により、完成は1954（昭和29）年になりました。また、この合同堰の完成と同時に、右岸側の西川用水や左岸側の祇園用水といった各用水路への配分方法も定められたことから水争いもなくなり、洪水により壊れる心配もなくなりました。



旭川合同堰（出典：岡山県農林水産部耕地課HP）

【旭川合同用水（管掛用水）】

管掛用水（のち旭川合同用水）は、岡山市玉柏・牟佐間の管掛堰から取水し、明見山北側で旭川に還流していました。

1663（寛文3）年、御野郡77ヶ村の大庄屋金萬平次郎（北方村）は、私財を投じて宿堀越（三野村・宿村間の岩盤）を掘って通水し、座主川の上を通し、三挺樋から取水した西川用水に合流させました。

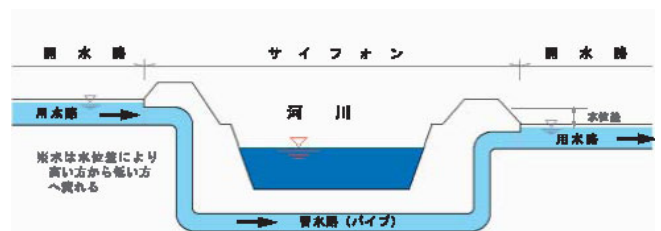
昭和13年、在来の管掛用水は旭川合同用水事業の一環で幹線用水路として改修されることとなり、1958年に右岸側の西川用水や座主川用水、左岸側の祇園用水へ接続する旭川合同用水として完成することとなります。

【旭川サイフォン】

旭川合同用水事業では、旭川の右岸側から水を取り入れることとなったため、祇園用水から運ばれる左岸地域へは、堰の下流約1.5kmのところ旭川の下を通る「サイフォン」により水が配られています。サイフォンとは、ポンプといった動力を利用せず水の圧力差だけを利用して、水をその水面より高い所へいったん導いて低い所に移す方法です。

旭川サイフォンは、高さ3.1m、幅2.0m、長さ398.32mの管水路を鉄筋コンクリートでつくるため、地上で建設するよりも大変な人出と費用が必要な工事となりました。その後、川底の土が流され、管水路がむき出しになっているため、新しいサイフォンがより深い位置に建設されました。

後楽園でもかつてサイフォンの原理を用いて、後楽園用水から水を引き込む工夫（現在は旭川からポンプで取水）が取り入れられていました。



旭川サイフォンの仕組み

（出典：『「晴れ国おかやま」の水と土のおはなし」岡山県農林水産部耕地課・農村振興課編）

旭川合同用水とその支流

【西川用水と西川緑道公園】

旭川合同用水から分派する西川用水は岡山市街の中心部を流れており、現在もかんがい用水の供給源として利用され、下流の農業地域を潤しています。

江戸時代の慶長年間、第2代岡山藩主池田忠雄が城下町と農村との境となる岡山城下の防衛のための環濠用水として、堀の西側に「西川」を掘って水路を整備されたとされています。

この用水は、当時、鹿田庄のための農業用水であると同時に1905（明治38）年上水道ができるまでの間、生活用水として炊事、洗濯にも利用されていました。現在、西川用水沿いには南北に細長い西川緑道公園が整備されています。この公園は、昭和49～57年度まで9カ年かけて、市街地の「緑の回廊」として総延長2.4km、総面積4.0haが整備され、心休まるオブジェや施設が点在した都会のオアシスになっています。



現在の西川用水と西川緑道公園
（出典：岡山市企画局情報政策部情報政策課HP）

【座主川用水】

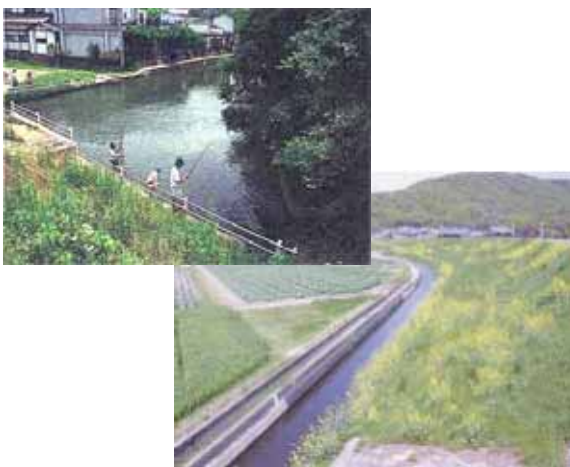
旭川合同用水から分派する座主川用水は、旭川西岸のかんがい用水路です。岡山市三野の六挺樋から取水し、管掛用水路の下を暗渠（トンネル）でくぐり、同市津島、伊福、万成などの耕地、約600haをかんがいでいます。

約650年前に、天台宗金山寺の荘園に水を導くため、天台座主の要請で造られたので、座主川となったといわれます。しかし、この川の水位が低いことや、川沿いに古代条里制の遺跡があることから、古い自然流路を改修したものともいえます。



岡山大学内を流れる座主川用水
（出典：『「晴れ国おかやま」の水と土のおはなし」岡山県農林水産部耕地課・農村振興課編）

祇園用水とその支流



現在の祇園大樋と祇園用水
（出典：岡山市企画局情報政策部情報政策課HP、
『「晴れ国おかやま」の水と土のおはなし」岡山県農林水産部耕地課・農村振興課編）

【祇園用水】

旭川合同堰から取水した水の一部は、旭川の地中を横断する旭川サイフォンによって祇園用水へと運ばれます。

祇園用水は祇園大樋（樋門）で新田用水、古田用水、後楽園用水、外田溝用水など幾つかに分けられ、旭川左岸一帯約2,000haを潤す幹線用水路となっています。上流部ではホタルやアユモドキも生かす河川改修が行われています。祇園用水のつくられた時代は明確ではありませんが、国府遺跡があることにより県南において最も早くから開かれた土地と推察されています。

『上道郡誌』によれば、用水路のつくられた時代は、室町時代の末に旭川左岸の農民が協力して旭川の水を利用する簡単な用水をつくれたのがはじめといわれています。江戸時代に入り新田開発に伴い藩営事業として土地の農民と協力し、大体今日のような旭川東部の農地を潤す大用水が完成したと考えられています。

【後楽園用水】

旭川上流の祇園用水から分派する後楽園用水は、百間川の底を横断し、導水していました。

旭川の水面よりも高い、中州にある後楽園は、サイフォンの原理を応用し 5 kmの上流の後楽園用水から水を誘水しました。しかしこの用水が家庭廃水によって汚染されたので、昭和 39 年からは園の北側に井戸を設け、毎分 6 t で汲み上げて曲水として使用しています。

近年、旭川右岸沿いに「水辺の回廊（旭川と後楽園、さらに市街地を結ぶ散策路）」が整備され、新しい都市景観を生み出しています。



現在の後楽園用水（左上：後楽園）
（出典：国土交通省 岡山河川工事事務所HP）

倉安川とその遺構



現在の倉安川

（出典：国土交通省 岡山河川工事事務所HP）

【倉田新田と倉安川】

1679（延宝7）年、藩営としては初の干拓である倉田新田が開発されます。そして、この新田開発に伴い、かんがい用水として、吉井川から水を引き、岡山城下を流れる旭川に合流する延長約 20 kmの倉安川が開かれました。倉安川は、岡山藩主池田光政が、臣下の津田永忠に命じて掘削に当たらせたもので、1年間で完成させています。この川は、岡山藩が1679（延宝7）年に干拓した倉田新田へのかんがい用水の供給のほか、和気・赤磐・上道3郡の年貢米の輸送、岡山城下へ出入りする高瀬舟の水路としても整備されています。また、川名の由来は、通過地にちなんで倉安川と名付けられたとされています。

【高瀬舟の舟行】

倉安川は、取水口として堤防に設けられた水門と、「高瀬廻し」と呼ばれる船だまり、高瀬廻しから倉安川の水路に出る出口に設けられた水門の三主要部分からなっています。

県指定史跡となっている「倉安川吉井水門」は、倉安川の吉井川側の起点に設けられた取水口であるとともに、船通しのこゝろもん 閘門³施設となっていました。

倉安川の掘削は、井ぞき造り・水門造り・水路造りの三つの工事が必要とされました。いずれも大規模である上に、高瀬舟の運行をも図っているため、他の地域での水路づくりと大きく異なっていました。特に水門づくりは難工事であったため、水位の異なる吉井川と倉安川に船を通すためには、水門を2か所につくる必要がありました。

吉井川堤防に「一の水門（吉井水門）」を、倉安川側に「二の水門」を造り、その間は水路を広くとって、「高瀬廻し」と呼ばれる船だまりを設けて、二つの水門によって水位の調節を行い、水位差のある二つの川の間船の行き来を容易にする工夫が図られていました。

船だまりは船の待避および検問に使われ、南側の護岸の上には船番所がありました。水門が二重になっているのは高瀬舟を通すために必要であり、船だまりは検問の場所にも利用されました。船だまり周辺の高い護岸は花崗岩の切石を積んで堅固に作られ、南岸に船番所を置かれました。水門も船だまりも原状のまま保存されている。



現在の倉安川吉井水門（県指定史跡）

3 閘門：水位の高低差の大きい運河や河川などで、船舶を通過させるために水をせき止めておく装置。

岡山市の上水道事業

岡山市は旭川の沖積層の上につくられた関係上、概ね湿地で飲料水として水質が悪く、たびたびコレラ等の伝染病が発生していました。

1890(明治23)年、岡山市は英国人技師バルトンを招き、水道敷設のための調査設計に当たらせました。同氏の設計によれば、水源を「牟佐渡しの下流、旭川右岸(管掛用水の取水口の下流)に設けるものでしたが、岡山市の財政難や洪水等で水道敷設は棚上げとなっていました。

しかし1902(明治35)年、岡山でコレラが大流行したため、水道敷設の工事が急務となります。その後、日露戦争等で工事の進捗が悪くなる中、1905(明治38)年ほぼ工事を終え、全国で8番目の近代的上水道の供給がはじまります。

その後も第1~7期と拡張事業が行われ、現在、岡山市の水の約90%は、旭川を水源として利用しており、平成12年度の給水人口は約62万人となっています。



上：三野浄水場第一水源取水口(明治38年創設時のもの)
下：旭川に立つ岡山市水道局三野浄水場取水塔
(出典：岡山市教育委員会 生涯学習部 文化財課HP、国土交通省 岡山河川工事事務所HP)

旭川からの取水状況と受益内容

農業用水については、旭川直轄区間における許可水利権3件、最大取水量18.447 m³/s、かんがい面積2,660haとなっている。

この中で1954(昭和29)年に完成した旭川合同堰は最も取水量が多く、最大取水量16.247 m³/s、かんがい面積2,490haである。

直轄区間における既得水利権の概要(出典：旭川水系指定区間外・水利現況調書(H12.10.31現在))

種別	件数(件)	最大取水量(m ³ /s)	受益内容	備考
上水道	1	2.401	計画給水人口約66万人	岡山市水道
工業用水	5	3.135		クラレ、岡山製紙等
農業用水	3	18.447 (内訳 合同用水16.247 その他2.2)	2,660ha (内訳 合同用水2,490ha その他167ha)	旭川合同用水等
雑用水	1	0.09		後楽園庭園用水
計	10	24.073		

ケレップ水制とは・・・



空から見るケレップ水制
(出典：国土交通省 岡山河川工事事務所HP)

明治時代の河川改修は、航路確保のための低水工事が主でした。オランダ人技術者デレーケ、ムルデルらを招き、彼らの指導により、水路の固定、水深の確保を目的とした「ケレップ水制」を施行しました。

ケレップ水制とは、船の航路を確保するために、水深が浅い河口部の流れを岡山市の中心地側に寄せて水深を確保したT字型の不透過水制のことです。旭川には1935(昭和10)年ごろ、平井、三幡に建設されたといわれています。現存するものは、旭川の下流左岸に位置する桜橋下流から旭川大橋の中畑地先まで、全部で19基となっています。

旭川新堰とは・・・

旭川と百間川に挟まれた倉安川以南の水田地帯の水田は、新堰よりも上流にある旭川合同堰から取水する祇園用水の末流と新堰から取水する水によって養われてきました。

現在の新堰は、旧堰が昭和40年代に入り老朽化したことから、昭和46年度に農林省補助事業として事業採択され、昭和52年度に完成したものです。

新堰の概要

型式 フローティングタイプ
堤長 90.0m



旭川新堰（出典：岡山県農林水産部耕地課HP）

旭川流域の渇水被害



右：山陽新聞平成6年8月18日 左：平成14年9月の渇水状況
（出典：国土交通省 岡山河川工事事務所HP）

旭川において、台風や集中豪雨のときを除いて、旭川の流況は比較的安定しています。しかし、平成6年と平成14年に渇水被害が発生しています。

平成6年、西日本を中心に異常渇水に見舞われ、8～9月にかけて45日間、上水道20%、工業用水30%、農業用水50%の取水制限が行われました。

このとき岡山市で送水圧を16.7%落とす第1次給水制限が初めて実施されたほか、県営プールも休業に追い込まれました。

旭川の流域の恵み

旭川は、多くの種類の植物・動物・魚類を育てる自然豊かな河川です。いまでも、祇園用水等の一部水域で見られるホタルやアユモドキをはじめ、旭川本川では、コサギやアオサギ、カワセミ、ハクセキレイ、カイツブリなどの姿を見かけます。

また現在、旭川高水敷では、グラウンドや公園・散策路などが整備され、憩い・安らぎの場として多くの人々に利用されています。

旭川の京橋下の高水敷で、毎月第一日曜日に「京橋朝市」が開かれています。商品は県内市町村の特産品、お店の数は約80店。平成元年9月に始まって以来、毎回2万人もの人々が訪れます。

その他、毎年「岡山さくらカーニバル」「夏まつり岡山納涼花火大会」などが開かれ、いずれも岡山市内屈指の恒例行事となっています。



岡山さくらカーニバル
（後楽園東側旭川高水敷（相生橋上手））
（出典：国土交通省 岡山河川工事事務所HP）